総合都市研究の編集の問題について

昨年３月に発行した『総合都市研究』第45号には1991年10月に開催した「都市問題に関する国際シンポジウム--大都市の成長：その限界と管理」の特集を掲載した。このシンポジウムは都市研究センターが主催した最初の国際シンポジウムであり非常に有意義なものであった。しかし、その記録の『総合都市研究』への収録方法、掲載内容にいくつかの問題があった。いちばん大きな問題は、所長時代に国際シンポジウムの企画をたて、予算獲得に努力され、当日、司会者として丸一日会議を適切に運営され、このシンポジウムの成功に大きな貢献をされた倉沢進人文学部教授（前都市研究センター所長）のお名前の記載をシンポジウムの概要とパネリスト及びコメンテーターのプロフィルを紹介した部分（総合都市研究45号、pp. 148-149）で落としてしまったことである。倉沢教授にたいしては、たいへん失礼なことであり責任者として深くおわびしたい。

このことを、英文のプログラム部分（総合都市研究45号、pp. 152）には倉沢教授の名前が入っており、都市研究センター年報などにも入っているので単純なミスだと言い訳するのではなしに、むしろこのことを機会に、総合都市研究の編集のあり方にまで立ち入って検討し、今後の参考にしてゆくことが重要だと考えている。

このシンポジウムは日本語及び英語を使用言語として同時通訳方式で開催されたので、総合都市研究の記録は、速記録によるのではなく、改めてパネリストに講演をもとにした原稿をお願いして掲載した。その結果、コメンテーターの発言、討論、司会者である倉沢教授のまとめを含む発言などは割愛されている。これは、同時通訳を通じては記録が困難という事情があったにせよシンポジウムの記録としては不十分であった。問題は、このような都市研究センターにとって重要な企画の内容をどう記録するかという点が、きちんと検討されなかった点にある。

現在の総合都市研究の編集委員会は極めて弱体で、問題の第45号の奥付には兼任研究員を含めて数名の名前があがっているが、実際には、この号に収録された公開講演会記録、国際シンポジウム記録、特集の論文部分の編集事務を別々の都市研究センター専任研究員が分けて担当した。この国際シンポジウムをどう記録として残すかは、都市研究センター内部でこのシンポジウムに関わった少数の者の間で検討されただけであった。本来、編集委員会、あるいは都市研究センターの運営委員会、都市研究センター所内会議などで十分検討して良い重要な課題であった。少なくとも、最初に企画され、当日司会にあたった倉沢教授に編集作業に加わってもらうべきであったろう。また当日の倉沢教授のまとめの発言などについても、たとえそのことで発行が少し遅れても、改めて原稿を書いていただくべきだったろう。

要するに、シンポジウム司会者名の脱落は、問題の氷山の一角で、総合都市研究の編集体制の弱体、ひいては都市研究センターの運営への学内の幅広い協力と英知の結集が不足している状況のもとで、総合都市研究の編集や都市研究センタープロジェクト研究の運営が専任研究員により請負的に処理されているという問題の一端があらわれたものであろう。確かに、都市研究センターは1993年４月からは６名、1994年からは８名の専任研究員がいる体制になり、独立の教授会を持つことを目指しているが、それ以後でも、プロジェクト研究の実施・運営、総合都市研究の発行は全学的な事業として進めてゆくのであり、今回のことを契機とし、今後、これらの事業を全学の協力のもとに行なう点で遺漏のないように努力したい。

1993年２月15日

都市研究センター所長　石　田　頼　房